

書評 末近浩太編『シリア・レバノン・イラク・イラン』（中村覚監修 シリーズ・中東政治研究の最前線 2）ミネルヴァ書房、2021年4月12日

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程

日本学術振興会特別研究員 DC1

早川英明

本書は、シリア、レバノン、イラク、イランを新たに生成される一つの「地域」と捉え、この「地域」の政治についての最新の知見を提供する論文集である。以下では、本書収録各論文の内容を大まかに整理した上で、本書の意義について論評する。

序章「中東に生成される新たな『地域』—シリア、レバノン、イラク、イラン—」（末近浩太）では、本書で扱う4カ国を一つの「地域」として括る意義を論じる。本章によれば、これら4カ国は西洋列強の介入、米国・イスラエルに「抵抗」という外交姿勢が共通しており、それに基づく安全保障同盟が結成されたが、やがて内政面での相互浸透が生じるようになった。その結果、新たな「地域」の生成が起こったが、それは中東の内部から生じた主体的な動きだけではなく、国際政治の力学との相互作用を通じて起こったのだとする。

第1章「イラン・日本関係—発展と衰退を繰り返す90年の歴史—」（千坂知世）は、イランと日本の二国間関係史を検討する。経済関係にのみに着目するのではなく、政治的な要因が経済関係に影響を与えてきたことを示した上で、イランと日本の関係はこれまで3つの盛衰を経験してきたことを明らかにする。

第2章「多文化主義—レバノンにおけるメディアの発達と分極化の進展—」（千葉悠志）は、レバノンにおいて、内戦終結後のメディア改革の結果、特にテレビが国内政治の分断状況を反映する形で分極化されてしまい、さらに湾岸からの投資が流れ込むことによって国外の政治対立も反映するようになったことを示す。

第3章「国家社会関係—シリア内戦がもたらした希薄化と親和化—」（青山弘之）は、シリアにおいて、内戦という危機的状況が、国家社会関係の希薄化をもたらした一方、主に民兵による国家の暴力装置の補完という形で、危機を乗り越えようとする国家の役割を社会が補完する親和化も生じたと論じる。

第4章「政軍関係—IS 後イラクの分断と奇妙な安定—」（山尾大）は、国家が集権的に暴力を管理できず、準軍事組織が台頭したイラクにおける、国家と準軍事組織との政軍関係を検討する。イラクで数多く誕生した準軍事組織にはそれぞれ様々な志向があり、これらの対抗関係から一時的な安定が生まれていると論じる。

第5章「選挙—イラン・イスラーム共和国と『公正な選挙』の必要性—」（坂梨祥）は、イランにおいては、選挙に様々な制約が課せられているが、体制が国民の選挙への参加を促す仕掛けを準備し、また有権者を引きつける選択肢を用意するのに対し、国民がこの選択肢のなかから望ましい候補を見出すことによって、国民の選挙への関心が維持されると論じる。

第6章「安全保障—『全方位提携論』とレバノン—」（小副川琢）は、「全方位提携論」を援用することで、内戦終結後レバノンの歴代首相が、内政を安定させるために、シリアという外部の脅威とヒズブッラーという内部の脅威に対して宥和的な態度をとってきたことを明らかにする。

第7章「外交—シリア内戦に見る米国覇権の黄昏—」（溝淵正季）では、米国のオバマ政権が有効な

シリア戦略を打ち出せなかった結果、シリア紛争の主導権を握れず、米国の中東情勢への影響力が縮小したと論じる。

第8章「治安—イスラーム過激派の越境移動の論理とメカニズム—」（高岡豊）では、イスラーム過激派組織への国境を超えた合流のための越境移動がどのように行われているのかを検討した上で、越境移動がイスラーム過激派の存在と不可分な行動であると論じる。

第9章「政治と経済—経済戦略から見るイラク・クルディスタンの独立問題—」（吉岡明子）では、イラク・クルディスタンの経済構造を分析し、石油収入に依存した経済は不安定で、独立国家を目指しうる経済構造とは言えないと論じる。

このような内容を持つ本書は、序章で述べられた通り、シリア、レバノン、イラク、イランを一つの地域として捉える視点を導入することが、これらの国々の政治やそれが中東や世界に与える影響の理解を促進することを示す意義がある。本書の論文はほとんどが一国の事例を対象にしているが、それらを注意深く読めば、いかに4カ国の内政が互いに影響し合うかがわかる。もちろん、これら4カ国の相互関係だけでこれらの国々の政治の全てが理解できるわけではないだろう。だが、4カ国ないしそこに存在する非国家主体が反米陣営を形成していることが、この「地域」の政治にもたらすダイナミズムにも目を向けることは、中東政治、国際政治を理解する一つの視角として有効である。

欲を言えば、この4カ国の人々の間に歴史的に形成された人的ネットワークや思想的影響関係についても更に検討があれば、これら4カ国を「地域」として括ることの説得力をより増したかもしれない。だが、それは本書の意義を減じるものではない。本書は、中東政治を理解するための新たな視座をもたらし、最新の研究成果を提供する良書である。(1992字)